

比庵佳境の会



山のまろぎに

みんなの 山のまろぎに
あした夕べに楽しみ餘りあり
比庵 立つ雲の

老いの若さー清水比庵展

二〇一七年九月十三日ー十一月二十四日

鶴沼海岸・オーシャンプロムナード湘南

山本陽一

一 開催に至るまで

一 開催に至るまで
昨秋、私が主催する柏葉（はくよう）篆刻会の作品展を湘南鶴沼海岸の老人ホーム「オーシャンプロムナード湘南」で開いた折、清水比庵の話が出て、鴨下館長が比庵に関心を示されました。そして今年六月、大崎のウエストギャラリーでの比庵展を見ていただいたところ、是非オーシャンプロムナード湘南でも比庵展を開きたいと申され、今回の開催となりました。

特殊な会場ですが、雰囲気の良い小さなホテルの小じんまりしたギャラリーといった感じでした。一般の見学者にも、フロントで親切に対応していただけます。しかし毎日見て作品に親しんでいただけるとは入居されている高齢の皆さんです。このことを念頭に比庵芸術の「老いの若さ」を具現すべく展示作品を選定しました。

晩年の親しみやすい画を主体に短歌、書、木彫り（窓日彫という）の盆・小机、磁器皿などの作品とともに、一〇〇年前に銀行員時代の比庵が書いた絵手紙も展示しました。絵手紙以外は晩年の作品で首都圏では初公開作品を主にしました。これらは清水 固氏はじめ、笠岡の美術商豊池 勇氏ほかの所蔵者の方々が快く提供されました。

絵手紙の展示方法については、鴨下館長がいろいろ工夫され、実物の他に、釈文（しゃくもん）を付けて、拡大印刷したパネルを組み合わせで見やすく展示されています。このほか鴨下館長にはオーシャンプロムナ

ード通信「海辺のさんぽ道」に比庵展案内の掲載、案内はがき、出品目録、釈文などいろいろお世話になりました。

二 比庵芸術の魅力

二 比庵芸術の魅力
・三年越し電車に腰をかけぬぞといばれる人の前に腰かく
・けんかする如く書をかく人のありわれは愛人とダンスする如く
一口に言えば、これらの短歌は肩肘張らぬ「脱力」系短歌です。クスツと笑わせ、そう、それでいいんだよと納得させられ、かくし味の批評も秘めていきます。若い人には詠めない、長い人生経験から身についた謙虚な境地です。比庵芸術は晩年に華開きました。

松竹梅

比庵九十三試筆



書も画も技術・技巧に走って袋小路に入り込み結果として単なる絵描き・字書きになつてしまふ連中とは違います。技術・技巧という常識の外に己に厳しい独創のたのしさを確立したのが比庵です。

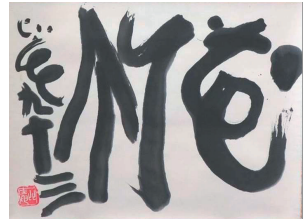
三 個々の展示作品の魅力

「松竹梅」

三 個々の展示作品の魅力
「松竹梅」
最晩年、数え九十三歳の新年試筆。息の長い伸びやかな線質、正に「老いの若さ」。半折一杯に、三字の偏と旁（つくり）を常識を無視して同じ高さに並べ、堂々として力ま

花竹

比庵九十三



「花竹」

直線の野太い「竹」が、曲線で右側を明るくした「花」と左傾する落款を受け止めて一画面に構成。

絵の構成か、「花」の下部の余白と小さい草冠と落款の点のような「比」がミソ。長い縦画は上を太く下を細くが常識だが比庵は逆。下へ行くにつれて太い。鈍重に見えて実は存在感抜群でしかも硬くこわばらない。

ふるさとへの海辺

花過ぎて或るは寒き日もありぬ

春の行方のしずかなりける 比庵九十一



「ふるさとへの海辺」

瀬戸内の海を見たことのある人には納得のいく海の明るさとだんだん畑の日ざし。

小舟では夫が投網を投げ、妻が船を使う。人物の点景が入ると、海風が頬を撫で、風景が生きてくる。歌の下句「春の行方のしずかなりけり」は老いてこそその心境。

「山の畑」

放菴紙（小杉放菴特注の越前紙）に模したといわれる手漉き和紙に金粉を交えて描かれた秋の山水。

夕陽できらめく遠景から、途中の紅葉の林隠れに前景へとS字に続く道がこの風景の要（かなめ）。農作業を終えた夫婦が林を抜けて家路を急ぐ。急に冷えて来た晩秋の空気が前景の林の中を歩きたくなる。「歌を作るによき畑なり」とは比庵ならではのユーモア。老夫婦が手かけた畑だから葉物も芋もきつとうまいはず。

「富士山」

富士山を見て体感する富士の力を、頂上部

山の畑

紅葉せる山の畑は何作る

歌をつくるによきはたけなり 九十比庵



分に大胆に簡略化したのが「比庵富士」。ル

オーの輪郭線から影響された息の長い太い稜線による、押出し十分の四つに別れた雪の頂き。「比庵富士」に並べてたのしいのは片岡球子の富士山。鉄斎や大観は技術にとらわれてスケールは小さい。第一彼らの富士山は楽しくない。

富士山を見るしあわせ。どうか噴火は我慢して下さい。

富士山（比庵富士）

富士の山見ゆるとろに居る人は

あした夕べにたのしかるべし 九十比庵



「大黒様」

墨だけでユーモラスに大黒様を描いて横に面白い歌が。狐一穴、鳥一巢、に対して人―銭と意表を突く対比。そのギャップに思わず吹き出してしまう。しかも「少し」とあるので俗っぽくならない。俗なことを扱っても低俗な表現では詩歌に昇華されず、文人精神にも反することになる。

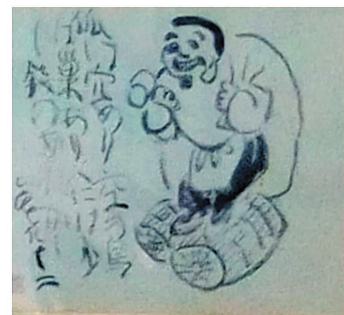
「赤々と…」

薄桃色の地の上に自然体で書かれた短歌。平常心の書。右下へ流れがちな行（ぎよう）の頭を次第に下げていき、五句目と落款で垂

大黒様

狐は穴あり空の鳥は巢あり

人には少し銭のあれかし 比庵九十二

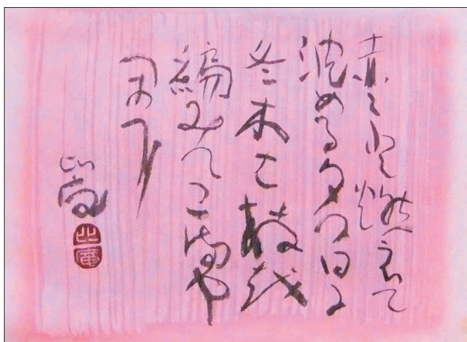


直にした調和の妙。偶然か意図的にか。落款印（下駄印）の印泥（いんでい）の色も薄桃色の地（じ）に合う。冬の夕焼けの写生歌。結句「編みてこまやかに」の字余り「に」が効いている。五音では余韻が残らない。夕焼けよ、いつまでも……。

赤々と燃えて沈める夕つ日に

冬木は枝を編みてこまやかに

比庵



「ほおつき」

ほかの画と比べてバラバラみただが、歌も画も同格に扱っている。ほおつきの実の橙色（だいたいいる）、葉の緑、歌の墨の濃淡。これらの対比と調和を狙ったか。花のない庭はつまらない風景で、ふつうはそこで目を外

ほおつき

夕日は庭を走れり花のなき
日かげのなを小さき蝶飛ぶ 比庵八十二



さすが、比庵はそこに射す斜光の中を飛ぶ小さい蝶を目で追う。ものをよく見る一例。よく見ればつまらないものにも発見がある。等々、ゆつくりと比庵作品を体感しましょう。展示会期がまだあるので（十一月二十四日まで）二度三度と見て下さい。

そこに並んでいる歌を見ると、比庵が如何に「毎日佳境」を心掛けて、心を豊かに育ててきたかがわかります。「毎日佳境」を心掛け実践することが、「老いの若さ」の実現にもなります。比庵芸術は長生きの特効薬です。「迫力ありますねえ」これは入居されている男性が奉加帳に書かれた言葉です。比庵芸術の「老いの若さ」に気づかれた言葉、お若い証拠です。益々お元気で。

以上

比庵さんを想う

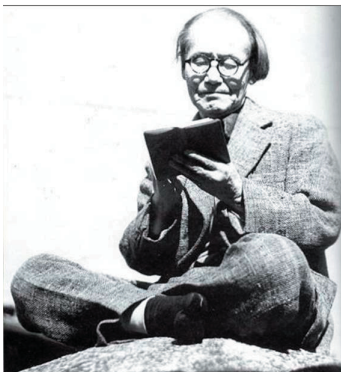
妹尾 彰



私は比庵さんの孫娘 汎子（ひろこ）と昭和四十年に結婚したことで、はからずも比庵の孫の一員になった。

現在の私の趣味は詩吟で、杜甫・李白に代表される中国の詩人や頼山陽・良寛に代表される日本の詩人の詩を通して中国や日本の歴史・人生訓・花鳥風月を愛でる豊かな心などを味わいながら老後の人生を楽しんでいる。特に良寛の漢詩や和歌が好きでよく吟じているが、その際、目の前によく比庵さんが現われてくる。比庵さんを知る多くの人が比庵さんとの想い出を畏敬の念と親しみをもって「今良寛」と紹介しているが、日本人の多くが良寛を「良寛さん」と親しみを込めて呼称するように「比庵さん」と自然に呼ぶのも比庵さんの人柄からむべなるかと思う。

良寛が若い頃修業のため通った倉敷市圓通寺(別名良寛寺)の石庭に坐して歌を詠む比庵



私比庵さんにお会いしたのは結婚後からで、年に一・二度とくにお正月の年始のご挨拶に清水家に伺った時であった。その際の印象を思い出してみると、当時私は比庵さんの歌・書・画についてほとんど予備知識がなかったもので、たゞやさしい人柄の方で歌書画をこよなく愛しておられる文人という認識であった。

しかし年を重ねお会いする機会が増えるにつれて私の比庵観は大きく変わった。それは古今東西の博識に裏打ちされた歌と書・画の奥行き

の深さが幾分分かるようになったからではないかと思う。今にして思えばもつと多くお会いして色々のお話を伺って置けばと悔やんでいる。私は比庵さんの描く雀が大好きである。賢こそうで可愛らしく又生き生きとしている風情は、観る人の多くに「比庵雀」と親しまれている。私には比庵雀にまつわる思い出があ

正月雀（高梁市文化交流館比庵記念室保管）

長歌 年々に屏風に一つ 雀を画き加へて 今はや六つになりぬ
わが室に訪ふ人は之を知り 今年の雀どの雀なりやと問ひぬ
どの雀なりや
反歌 此の年は 孫がいふゆえ 羽広げ 飛び来し雀 画き加へぬ
比庵七十五歳

家に古い屏風があった。左の方に竹が描いてあるのみだったが、昭和27年正月二日に岩の上に雀が一羽止まった絵が描かれているのに気付いた。私はアツと声をあげた。何とも可愛くそれだけで部屋にうるおいが来た。よからうが、毎年一羽づつ描き足して行こうかと思っている。何羽までふえるかなと文は言っていた。比庵雀のなかでも毎年お正月に描かれる雀は正月雀とも呼ばれた。

清水明子「比庵あけくれ」より
註：雀の数は24羽まで増えた

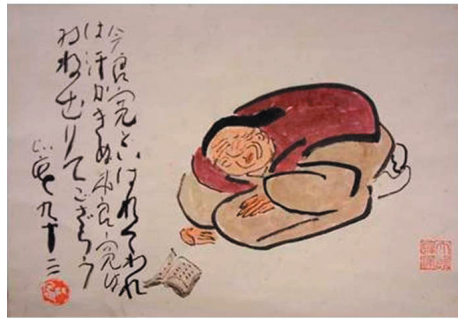


る。比庵さんは七十歳から毎年正月に自宅の応接間にある屏風に描かれている「竹やぶと雀」の中に雀を一羽づつ描き加えることを「正月の事はじめ」とされていた。そして家族の者に今年描き加えた雀はどれかを問うのを楽しみにしていたようで、我々も一生懸命に画

今良寛

今良寛といはれてわれは汗かきぬ
本良寛はぬむりてござらう

比庵九十三



を凝視し前の年の画を思い出しながら答えていた。
歌にしてもそれまでは深く考えずに読んでいたが、昭和四十一年正月の宮中歌会始の儀に召人として参列、御題「声」を詠進されたことで比庵さんがその道で広く名を馳せてお

ほのぼのと むらさきにほふ 朝ほらけ
うぐひすの聲 山よりきこゆ

昭和四十一年試筆 比庵八十四
(昭和41年歌会始めの召人の歌)



られた歌人であることを知り、その後は熟読するようにになった。
私は定年退職後改めて比庵さんの歌書画をじっくり鑑賞したり孫の固さんの、比庵を語るのトークを聞きながら、比庵さんの偉大さを感じている。
おわりに私は二人の子どもを連れて清水家に行く、比庵さんがいつも子どもたちに「よう来た、よう来た。」と話しかけていたやさしい笑顔を忘れることができない。子どもたちも比庵さんが大好きであった。それは良寛さんをみるようで正しく今良寛であった。

追記

比庵が最も尊敬していた人は過去の時代では良寛、同時代では川合玉堂だったと思われる。良寛については昭和四十四年週刊朝日に「今良寛」として紹介され、「今良寛といはれてわれは汗かきぬ本良寛はいぬむりてござらう」と詠んでいる。また良寛の言葉の中から「毎日佳境」の文字を自分の標語にし、「窓日(そうじつ)」という言葉を主宰する歌会の名前にしている。良寛の作品(画と書)も多く描いている。

比庵の自用印について

相模女子大学教授

柿木原 くみ

比庵の自用印の使用について、調査を始め一年近くになる。調査対象は次の通りである。

- 『比庵』(昭36・楽書芸院)
- 『清水比庵集』(昭42・書道研精会)
- 『八十五比庵』(昭92・比庵)八冊(昭42~49・書道研精会)
- 『比庵歌書画』(昭43・求龍堂)
- 『野水帖 比庵歌・書・画』(昭45・清水三溪編集発行)
- 『比庵いろは帖』(昭47・求龍堂)
- 『清水比庵作品集』(昭53・朝日新聞社)
- 『比庵百華』(昭63・比庵百華刊行委員会発行)
- 『清水比庵 毎日歌境』(平13・笠岡市立竹喬美術館)
- 『まどかなる清水比庵―歌と書画の世界―』(平21・二玄社)
- 『現代の歌聖清水比庵』(平25・笠岡市立竹喬美術館)の他、高梁市立歴史美術館・遠山記念館・ワコミュージアムで発行した比庵展の図録

作品毎に押捺されている印を検証し分類していく作業はあらかた終り、現在は考察を進めているところである。ここでは、『清水比庵作品集』と『比庵百華』、それに『清水比庵 毎日歌境』に紹介されている印譜と、清水家に保管されている印との関わり中での幾つかのことを紹介しようと思う。

『清水比庵作品集』には三十五顆、『比庵百華』には七十二顆の印影が原寸で掲載されていて、これらは刊行のために押捺した印影であると推察する。『清水比庵 毎日歌境』には、七十三顆の印影が掲載されているが、凡

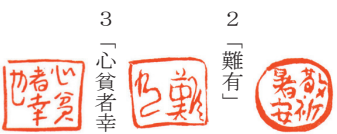
例に、比庵の印章のうち現在確認されているものの中で、印影の明確な七十三顆を、とあるように比庵の作品より印影を採取し、原寸での掲載ではないところが特徴である。また、七十三顆中、No.51と59は同印と考えられるので、実質は七十二顆となり、うち『比庵百華』と同印は、七十一顆である。これら二冊の印譜で異なる印は各一顆で、百華が「文墨友」(朱文)、毎日歌境が「清水秀」(朱文)である。また、『清水比庵作品集』の三十五顆はこれら二冊の印譜に含まれる。

従って公表された印は「清水比庵 毎日佳境」と「比庵百華」の各七十二顆の内共通の七十一顆とそれぞれにある「文墨友」と「清水秀」を加えた七十三顆となる。

一方清水家に保管されている印は七十二顆あり、このうち四十四顆は「比庵百華」と『清水比庵 毎日歌境』の印影の中で確認できるが、残りの二十八顆の所在は確認できず、印譜として未公表となる。従って「清水比庵 毎日歌境」と「比庵百華」に公表されている印七十三顆と清水家に保管されていて公表されていない印二十八顆を加えると比庵の自用印数は一〇一顆となり、その内清水家保管の二十八顆の所在は未詳である。

- 比庵の愛用印のうち二顆は、石印と木印の二顆が存在するが、これは、旅行先に持参するために、石印を木に模刻したものである。清水家の七十二顆にはそのような印を四顆として数えている。また、比庵の直筆をそのまま刻した「敬祈暑安」「難有」「心貧者幸」といった印も含まれている。比庵の愛用印と作品との関連についてや刻者については、稿を改めたい。

以上



比庵の絵手紙を展示して

学芸員吉兆庵美術館

岡田 直子

吉兆庵美術館は和菓子を製造販売する宗家源 吉兆庵が運営する美術館で、岡山と鎌倉の駅からほど近い場所で伝統工芸品をご紹介します。特に地元ゆかりのある工芸品をご紹介しますという想いから、岡山・吉兆庵美術館では備前焼のほか、清水比庵先生の作品もかねてよりコレクションしています。

今回は「絵手紙を愛した歌人 清水比庵」を開催し、比庵先生の大正時代と昭和時代の絵手紙、そして書画作品を併せて展示しています。比庵先生の作風は歌・書・画が三位一体となった作品で有名ですが、三十歳代前半を過ごした秋田県横手市や青森県でスケッチした絵葉書の文章を見ると、雪国で過ごす単調な生活の中で、流行に取り残される不安や淋しさも窺え、このような苦労があつて比庵先生の中の人間味が培われたのではないかと改めて気がつかれます。

京都帝国大学を卒業し、神戸の司法官から判事になるなど輝かしい経歴の持ち主です

銀行員時代の絵手紙 桑の葉

秋田県横手町時代

大正4年 比庵32歳



銀行員時代の絵手紙 秋日和

青森時代

大正5年 比庵33歳



が、肋膜炎を患ったことがきっかけで病弱な体質になり、体の負担を軽減しようと二十八歳の時、民間企業である安田銀行へ勤めるようになり。さらに三十二歳の時には上司の配慮により東京から秋田県横手市の支店へ配属されます。経済の中心である東京から田舎町へ移ることはもちろん体に無理の少ない生活を送ることができましたが、一方で地方は物が手に入りやすく、友人から書籍を送ってもらったり、東京の様子を手紙で伝えてもらったりしていました。そのお返しとして比庵先生からは地元の祭や風景、家庭内の出来事をはがきにスケッチしました。この絵手紙のやりとりが多い時で毎日続けられ、淋しさを紛らわせる手段となっていました。

「一日に一人も友人が訪問してくれなくても大した寂寞は感じませんが、一日に一枚も手紙が来ない日は大変もの足りないような気がします。」と東京時代の元同僚に伝えていました。

そしてこの絵手紙が二人だけのものではなく、次第に周辺の人々も巻き込んでいくようになります。ある日の手紙を見ると「横手郵便局ではあなたの手紙と小生のとを見て喝采して居るさうです。あなたは郵便局で有名な

一人となりました。」とあるように、度々郵便局に届く二人の絵手紙を局員たちも楽しみに待つようになり、比庵先生にとってもより絵手紙のスケッチに力が入るようになったことでしょう。そして徐々に絵手紙には歌が添えられるようになり、後の三位一体となる作風に少しずつ近づいていくのです。

比庵富士

ほのぼのと夜のあければ駿河のや

朝日まっさす富士の高嶺に 比庵八十八



感じていただければと思います。比庵先生は後年「物や手段の少なかつた時代に絵手紙は私の芸術の恰好な練習場になった」と語っておられます。絵手紙は比庵芸術のさきがけでした。

今回の比庵展の絵手紙展示では、一〇〇年前の実物はがきの裏面と共に、はがきの両面と活字化した文章を拡大印刷して見やすくしたものをつけて展示しています。

なお鎌倉での比庵展は既に終了しましたが、岡山での展示は十一月五日(日)まで開催しております。

清水比庵の歌 (三)

秋葉 貴子

「窓日」編集長

朝日いま上らんとしてくれなるに
東なかばを染めばかしたり

「朝日に雀」の画は添えられた歌とともに昭和四十九年比庵晩年の作である。

大いなる遠景のなかに、太陽とそして太陽に向かって飛翔する雀数羽、小さな翼をひたすら広げて飛ぶ雀の姿は、いかにも躍動感に満ちている。

画にも感銘を受けるが、歌には更なる感銘を受ける。大自然の美しさを最大限に表現した歌であると思う。

朝明けの無垢の空を染める「くれなる」、

朝日に雀

朝日いま 上らんとしてくれなるに
東なかばを 染めほかしたり

比庵九十二



それは比庵が生涯好んで止まなかつた「くれなる」であり、朝日と相俟って、荘厳さも然りながら、それを、「東なかばを染めほかしたり」と、宇宙の神秘を、美しく表現している。晩年に至っても衰える事なかつた、比庵の美意識をそこに見る思いである。

加齢の矜持

笠岡市美術商

豊池勇

清水比庵先生は備中松山藩の藩士の血を引く父清水 質と母スエの長男として生まれました。父は清水秀(後の清水比庵先生)が十五歳の時に、四十六歳で逝去しています。

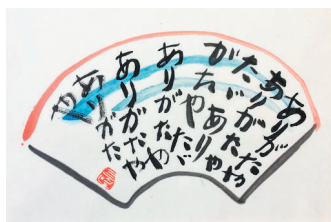
それから遠縁の福西家で書生の暮らしが始まりますが、母と三人の弟妹の為に総領としての自覚と責任を常に背負った人生でした。亡父と同じ法曹界の道を歩むべく、精進と鍛錬を重ね京都帝国大学法律科を卒業。その後には司法官として社会にデビューします。されど、司法官が自分には合わない判断し安田銀行へと職を替えています。その間も一貫して生活習慣と自己鍛錬に気を配る毎日を送っていたと想像します。それは生涯を通じて行われていました。私は笠岡での展覧会の期間中に比庵先生に接した経験があります。毎日必ず昼寝の時間を設けていらつしやいました。

夜は接待にこたえず自分の時間を大切にされ早く床に就いていました。その様子はストイックなものや印象がなく、長い年月を掛けて自分の身体に合うものが身に付いたといった自然なものでした。東京・駒込の家では手を叩きながら、そして大きな声で歌を吟じながら廊下を行き交いする運動を日課にしていたとお聞きしました。

現在、ロスアンゼルスにお住いの孫・充子さんに依りますと、ご近所の方が「清水さんは新しい宗教に入られましたか?」と質問を受ける程だったそうです。それほどに比庵先生は健康維持に真剣でした。

父と年少の頃に死別し、残されたものの将来を考慮すると健康の維持の大切さを先ず実践するライフスタイルが身に付き、後年は

健康であるからこそ見えてくる世界に歓びを見付けて歌境を拓けています。比庵芸術の特徴の一つである言葉の繰り返す事による独特のリズムある和歌の中にも「すこやか」と云う言葉がしばしば出てきます。更に八十歳を超えたる頃から、年を重ねる事に誇りを持って生きていた感じが汲み取れます。それはそれまでは見えなかった気が付かなかった世界への驚きと感謝の気持ちが内側から湧き上がって来た歓びでしょう。



「芸術は長生きが勝負だ。」という言葉を残していらつしやいます。長生きすれば、昨日までには見えなかったものが、今日は見えて来て新しい世界が拓ける。それを矜持(プライド)として、毎日を大切に過ごして来たのでしよう。まわりの全てに感謝を抱きながら。

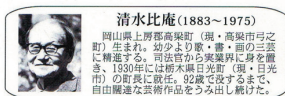
岡山市内の古刹・法界院にある清水比庵先生の歌碑にその情愛が記されています。

「ありがたや ありがたや ありがたや ありがたや ありがたや ありがたや ありがたや ありがたや」

清水比庵先生の生涯は周りの多くの方の尊敬と好意に包まれ、周りに対し「感謝」で歩んだ人生でした。

筆者の豊池氏は父親の代から比庵フアンの美術商で、生前の比庵を知る数少ない方々の一人です。比庵作品を多く取扱い、我々が企画

追記



清水比庵(1883~1975)
岡山県上野郡高梁町(現・高梁市弓町)生まれ。幼少より歌・書・曲の三途に精進する。司馬遼太郎氏に師事。1930年には榎本島日光町(現・日光市)の町長に就任。92歳で没するまで、自由随筆な芸術作品をうみ出し続けた。



介護付有料老人ホーム
オーシャンプロムナード湘南
〒251-0037 藤沢市鵜沼海岸2-11-17
TEL: 0466-30-5251

清水比庵(しみずひあん)展

93歳で亡くなった年の書き初めも初公開



比庵90歳の富士山



約100年前(大正時代)の絵手紙

歌・書・画
三位一体の芸術家、
絵手紙の元祖比庵の作品が登場です。

■日時: 2017年9月13日(金)~11月24日(金) 10時~17時
■会場: オーシャンプロムナード湘南 1F 展示スペース
■入場: 無料
■展示内容についてのお問合せ: 比庵 佳境の会・清水園 ☎045-893-8932

会費納入のお願い

29年度の会費を納めていない会員の方は下記に納入されますようお願い致します。
一口、1,000円(複数口歓迎)
三井住友銀行鶴見支店普通 7061558
名義 クボタノブユキ

比庵佳境の会

会長 清水 固(清水比庵の孫)
〒247-0022 横浜市栄区庄戸3-5-18
TEL&FAX 045-893-8932
URL: <http://www.hat.hi-ho-ne.jp/katashi-shimizu/>
幹事: 比留間 哲生
〒247-0022 横浜市栄区庄戸3-25-7
TEL 090-4608-0488

清水比庵展のお知らせ

おかげ様で比庵の人氣が高く今年も各所で比庵展が開催されています。

◎吉兆庵岡山美術館
現在開催中(十一月五日まで)
本文に詳細記載 岡山市北区幸町七一
二十八(086-1364-1005)

◎オーシャンプロムナード比庵展
現在開催中(十一月二十四日まで)
本文に詳細記載
神奈川県藤沢市鵜沼海岸二二一十七
(0466-130-5251)

◎墨の美術館 清水比庵展(予定)
二〇一八年一月九日~一月二十一日
横浜市青葉区みたけ台十一~十三
(090-13439-15014)

◎ウエストギャラリー清水比庵展(予定)
二〇一八年六月(詳細未定)

◎山種美術館川合玉堂展
十月二十八日~十二月二十四日
東京都渋谷区広尾三二~三三三六
(03-5467-1101)

玉堂の作品とともに清水比庵など親しかった人々との交流関連作品も展示